

# おきなわへいこう上

あらすじ

長い病院生活の中で生まれた夢  
一度でいいから沖縄へ

文/監督・大西暢夫

大阪府堺市にある浅香山病院の精神科病棟。何十年と長期入院している患者さんがたくさん暮らしている。そのうちの一人、益田敏子さんが、「生涯のうち一度でいいから、沖縄へ行ってみよう」という夢を語ったことをきっかけに、有志の看護師たちが、その夢を実現させようと動き出す。他の患者に参加を募ったところ、名乗りを上げたのは4人の男性患者たち。いずれも長期入院の人たちだった。

しかし、最初に言いだしたはずの益田さんが、旅行計画が具体化し始めると「私、やっぱり行かない」と気持ち揺れ動いた。4人のうち3人の男性患者たちは同じ一人の主治医。しかしその主治医からの許可がおりない。なんとか許可してもらえないかと外泊届を出したものの、受理されることはなかった。結局、3人の男性患者たちの沖縄旅行は叶わぬ夢に終わってしまった。精神科では、たかが沖縄旅行、されど沖縄旅行なのである。



益田さんは一時外泊もう一人の山中信也さんは、この旅行をきっかけに10年の入院生活に終止符を打った。そして3泊4日の沖縄旅行が実現した。浦添市の若竹福祉会で行われ



ている浅香山病院の写真展に招かれ歓迎を受けた。益田さんがよくお母さんと唄った「故郷」をみんなで合唱しようとしたその時、感極まり唄うことができなくなった。

扉の向こうとこちら隔てるものは何か

旅は無事に終わり、益田さんは病院に戻り、退院したはずの山中さんは再入院した。病棟での益田さんの表情は明るく、話も弾む。そして山中さんに、大きな転機が訪れる。「彼女の存在は、何よりの薬やな!」目の前に、偶然にも同じ苗字のはるみさんが現れたのだ。それも一つのきっかけとなって、看護師チームが動いた。そして「退院したくない」と言い続けていた山中さんを退院へ導いた。恋人のはるみさんの存在は山中さんにとって大きな支えとなった。

勤続30年以上の元看護部長だった小川貞子さんが、退職後にNPO法人kokolinaを立ち上げ、精神障がい者の居場所を設立した。この沖縄旅行の火付け役でもあった彼女は、今までやってきた精神科



看護の経験をあらためて振り返った。なぜ、日本には長期入院する患者が多く存在するのだろう。病院と患者のそれぞれの高齢。受け皿となる地域社会。扉の鍵が開まるうとする開放病棟の夕刻。向こうの垣根に帰っていく患者たち。世間の狭間を行ったり来たり、今日も変わらず穏やかに暮らしている。

## 監督紹介

おおにしのお (写真家・映画監督)  
1968年岐阜県揖斐郡に暮らす。写真家・映画監督の本橋成一氏に師事。ドキュメンタリー映画「水になった村」「家族の軌跡」を製作し、今回で3本目となる。月刊誌「精神科看護」の取材で、全国の精神科病棟を現在も撮り続けている。精神科特有の長期入院に疑問を抱きながら、患者と寄り添う取材が続く。



◎配給 おめでたい作業所 (NPO法人kokolina)  
◎問合せ onmedetai191@gmail.com  
Facebookページ



## オキナワへいこう上映会&大西監督講演会

令和元年12月14日(土)13:30~16:00(開場 13:00) 入場券:500円

販売窓口: 訪問看護ステーションReafくるめ・筑後市総合福祉センター (福岡県久留米市原古賀町18-11 リーガルタックスビル3F)

会場: 筑後市総合福祉センター (福岡県筑後市野町680-1)

問合せ: 筑後市社会福祉協議会  
〒833-0032福岡県筑後市野町680-1  
TEL 0942-52-3969(平日8:30~17:15)  
MAIL info@chikugo-shakyo.or.jp

主催: 社会福祉法人筑後市社会福祉協議会

共催: (株)ラポート 訪問看護ステーションReafくるめ・筑後市ボランティア連絡協議会